

脱「魔女」化する「占い・おまじない」

——90年代『マイバースデイ』を中心として——

橋迫 瑞穂

本稿は、1980年代に少女たちのあいだで受容された「占い・おまじない」ブームが、90年代においてどのように変化してきたのかを、代表的な少女向けの「占い・おまじない」雑誌『マイバースデイ』を素材として明らかにすることを目的とする。筆者がすでに別の機会に明らかにしたように、80年代の「占い・おまじない」は、少女たちに白魔女という理想像と、それに向かって努力する存在である「魔女」のモデルを提示し、学校での人間関係に向き合う努力に指針を与えるものであった。しかし、90年代に入ると「占い・おまじない」のこのような性格は失われ、代わって、学校生活における人間関係を分析し、そのなかでの自己の位置を見極める「地図」の役割を担うようになった。一方、そのような役割とは分離した形で「精神世界」について言及する記事も見られるようになる。こうして「占い・おまじない」は、90年代においてその役割が分化していったのである。

1 はじめに

P・L・バーガーは『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』のなかで、近代以前の社会における人びとは、私的領域、公的領域といった分化したひとつの「世界」ではなく、統合された「世界」に生きていたと述べた上で、世界の統合的な意味秩序をあらわす型やシンボルが、かつては宗教的なものであったとしている。だが近代において、宗教は社会の意味を統一する「包含的な天蓋」の役割から後退し、「世俗化」した。さらに、近代科学などが「神秘・魔術・権威」といった宗教性の信憑性をも下落させるようになる。その結果、「世界」は複数形になり、人びとは期待といった幻想を排除しつつ、「過去の経験の記憶と将来の計画」に基づく「社会の地図」を自身で作成し、そのなかに自己を位置づけなければならなくなった。こうした「地

図」を作成するような人々の思考のありかたはきわめて社会的なものであり、バーガーはそれを「一般的な『社会学』」と表現している。そして、「異様に未確定」なアイデンティティを生きねばならなくなった近代人の状況を、バーガーは「安住の地の喪失」(homelessness)と呼ぶ(Berger et al.1973=1977: 70-94)。ただし、宗教は社会から退場したのではなく、私的領域のなかで選択されるものへと変化したとも指摘している。

だが、今日の日本社会では、広い意味で宗教に類する文化が、バーガーのいう「地図」を提供する役割を担うようになったとする立場がある。芳賀学と弓山達也は、現代日本社会における宗教に近い若者文化の一つの現れとして80年代の「占い・おまじない」ブームを取り上げている。そして、そのブームを代表するものとして、少女向けの占い雑誌『マイバースデ

イ』に取り上げられた西洋占星術に注目している。彼らによれば、占いは、生得的属性である「誕生時」をもとに、個人が自身の内面や周囲の人間関係を解釈し、そこで生じる「重い」関わりを回避しつつ「自己の生き方への確証」を獲得する支えとなる役割を担うものであった。また、「誕生時」にもとづいて、幸福になるための手段を導き出す「おまじない」にも、同様の役割が見いだされる。こうした働きから、彼らは「占い・おまじない」の役割を「認識のための『地図』」（芳賀・弓山 1993: 222-224）と表現するのである。こうした「占い・おまじない」の示す「地図」はバーガーのいう「地図」とは異なり人間関係を主題とするものであるが、いずれにしても「地図」を作成し、そこに自己を位置づけるという手順においては同じ役割を果たしていると言えるだろう。

しかし、筆者は 80 年代の『マイバースデイ』の記事を改めて検討することで、「占い・おまじない」が「認識の地図」を提供するのは異なる側面を持っていたことを明らかにした（橋迫 2014b）。すなわち、権威づけられた占い師によって示される「占い・おまじない」は、神秘的な白魔女という理想像を設定し、その理想を目指して努力するという「魔女」のモデルを提示するものであった。かつて宗教が「包含的な天蓋」として社会の意味を統一するシンボルを示したように、80 年代の『マイバースデイ』の「占い・おまじない」が示す「魔女」は、少女たちが直面する現実の社会関係に、その意味を統一する「天蓋」を示すものであったと考えられる。だが 90 年代に入り、『マイバースデイ』はその内容が大きく変化した。では、90 年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」とはどのような内容のものであり、読者である少女たちに対してどのような自己のあり

かたを示すものだったのだろうか。そしてそれは、「魔女」のモデルを示してきた 80 年代の「占い・おまじない」とどのように異なるのだろうか。このような視点から、本稿は、『マイバースデイ』における 90 年代の「占い・おまじない」の変化に注目し、明らかにすることを目的とする¹。

この目的のために、「占い・おまじない」ブームを代表する少女向けの占い雑誌、『マイバースデイ』を取り上げる。筆者はすでに、国立国会図書館分館の国際子ども図書館に所蔵されている、同誌 1979 年創刊号から 2006 年に休刊されるまでの全冊のうち、80 年代に出版されたものについて分析を行ってきた。本稿ではそれを踏まえた上で、90 年代に発行されたものを検討する。『マイバースデイ』は実業之日本社より刊行された、女子中高生を主な読者層とする「占い・おまじない」を専門とする雑誌であり、全盛期には公称約 40 万人の読者がいたとされている²。当初は主に西洋占星術を中心としたものであったが、次第に多様なトピックを取り上げるようになった。また、一般的なライフスタイルについての記事を掲載し、さらに、これらの記事は新学期や卒業式、バレンタインデーなどの学校生活に関連する行事にあわせて特集が組まれてきた。こうした『マイバースデイ』は、これまでさまざまな観点から取り上げられてきたが、『マイバースデイ』それ自体が検討の対象とされてきたことはなかった。

同時期には『マイバースデイ』からの派生として、より幅広い世代に向けて「占い・おまじない」の情報を専門に掲載した『MISTY』（1989 年）や、社会人の女性に向けた『moniQue』（1989 年）、小学生向けの『プチバースデイ』（1987 年）などが創刊されている。また、学習研究社より少女向けのファッション誌でありながら

「占い・おまじない」についても取り上げた雑誌『Lemon』（1982年）や、いわゆるオカルト雑誌『ムー』の姉妹誌である『Elfin』（1990年）なども出版されている。そのなかで『マイバースデイ』は、中高生を対象として、彼女たちの日常である学校生活と「占い・おまじない」を結びつけてきたということに特徴がある。こうした流れは他の雑誌にも見られるが、例えば『プチバースデイ』が小学校での遊びの一つとして「占い・おまじない」を示していたのに対し、80年代の『マイバースデイ』は「占い・おまじない」を、中高を中心とする学校生活でどのように生かすのかについて、正面から取り組むものであったという違いが見いだされるのである。ただしこのことは逆に言えば、『マイバースデイ』の「占い・おまじない」とは、学校生活に限定して効果を発揮するものであったとも言えるだろう。

その『マイバースデイ』は、これまで大きく二つの観点から言及されてきた³。一つは、「宗教ブーム」を取り上げる観点のものである。例えば、島藺進は「宗教ブーム」を構成する一つとして、メディアを通して広く大衆に浸透したものを「呪術＝宗教的大衆文化」と呼び、その例として『マイバースデイ』を挙げている。こうしたものが広まった理由として島藺は、個人主義的な生活スタイルが広まっていく社会のなかで「個人的な宗教情報の消費や霊性追求」が求められていたからであるとしている（島藺2001: 172-196）⁴。もう一つは、少女文化を取り上げる観点からのものである。大塚英志は80年代の少女文化を論じるなかで、『マイバースデイ』で取り上げられた数々のおまじないグッズに注目している。そして、そこには実現可能性の乏しい異性との両想いといった事柄に祈りをささげることで、「ケガレ」のない独自

の世界に生きることを少女たちが望んでいたと述べている（大塚1995: 187-212）⁵。

このように、80年代の「占い・おまじない」ブームに関連する形で『マイバースデイ』が注目されてきたが、それが90年代以降どのような変化を遂げてきたかについては、これまでほとんど論じられることはなかった。その大きな理由として、1995年に起こったオウム真理教による地下鉄サリン事件の影響が挙げられるだろう。95年以降、宗教学、宗教社会学において、オウム真理教が出現した背景である「宗教ブーム」が批判的に検討されるようになったが、そのなかで「占い・おまじない」ブームはその一要素として触れられるにすぎなくなる⁶。だが、2000年代に入ると「占い・おまじない」は「スピリチュアル・ブーム」を構成する一つの要素として、再び議論の対象にもなった（有元2011; 橋迫2012）。ただし、「占い・おまじない」ブームが少女を主役とするのに対し、「スピリチュアル・ブーム」は大人の女性が中心であるという違いがある⁷。

他方で、一般的な女性誌や、ファッション誌においても占いやそれに類するものが取り上げられており、そうしたものに注目する議論も行なわれてきた（粟飯原・ガール1989: 200-8; 諸富1993: 55-106）。例えば、牧野智和は、SNSの広がりや占いを含む「自己啓発本」の潮流を、自己に対する漠然とした悩みや問いを特定のものに形づくり、実践可能なものとする知識や技術（「自己のテクノロジー」）の登場としている。こうした流れを、彼はアンソニー・ギデンズの議論（Giddens1992=2005）から「自己の再帰的プロジェクト」ととらえている（牧野2012: 1-12）。その上で牧野は、女性向けのライフスタイル誌『an・an』に登場する「女性の生き方をめぐって発言力を持ち、指導的な

役割をになう」さまざまな職業、立場からの人びとを「権能複合体」と呼び、その中に占い師が含まれていることに言及する。そして、それが「自己の再帰的プロジェクト」として「自己の主体化のための資源」を提供しながらも、あくまで「女らしさ」を前提としたジェンダーの枠内にあることを指摘しているのである（牧野 2012: 135-187）。こうした「占い・おまじない」のありようは、『マイバースデイ』に近い性質を持っていると言えるだろう。

ただし、一般的なファッション誌やライフスタイル誌のなかの「占い・おまじない」は、全体の記事内容の一部にすぎない。例えば、牧野が取り上げた『an・an』など定期的に占いの特集を組むファッション誌、ライフスタイル誌は存在するが、それも全体から見れば一部分であると言えるだろう。ただし、こうした雑誌は「占い・おまじない」をファッションやライフスタイルの延長上に置くことによって、広く女性の関心をひくものとなっている。それに対して、『マイバースデイ』は一貫して「占い・おまじない」に関する記事が圧倒的な部分を占めていたという違いがある。さらに、その読者層は「占い・おまじない」に関心を持つ女子中高生を読者層とし、学校生活と組み合わせることで独自の内容を示すものであった。したがって、本稿で論じる「占い・おまじない」は少女と学校という結びつきに重点を置くものであり、また、あくまでも雑誌という媒体の中にあられた側面を明らかにするものである。こうしたことから、『マイバースデイ』という雑誌においての、「占い・おまじない」の変化を検討するものであることをここでは強調しておきたい。

この点を注視しつつ、本稿では2でこれまで筆者が行ってきた80年代の『マイバースデイ』

についての検討をもとに、「魔女」のモデルについて明らかにする。次に3では、90年代『マイバースデイ』とそこに見られる「占い・おまじない」の内容の変化や特徴を、学校生活と結びついたものについて整理し、4では「占い・おまじない」が示す「精神世界」のありようについて検討する⁸。その上で、5では80年代の「占い・おまじない」と比較しつつ、改めて90年代の「占い・おまじない」の動向について明らかにする。

2 80年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」

ここではまず、80年代に出版された『マイバースデイ』における「占い・おまじない」の内容とそれが示す「魔女」のモデルについて、筆者がこれまで明らかにしてきた特徴をもとにその要点を挙げることにする（橋迫 2014a; 2014b）。

述べたように『マイバースデイ』はライフスタイルの記事をも掲載してきた。80年代のライフスタイル関係の記事では、少女たちにとって身近なファッションや小物などを紹介するほか、DIYや裁縫、料理のレシピなどの手引きも取り上げられていた。また、学校生活にかかわる悩み事のほか、異性のこと、将来のこと、留学のことなども定期的に取り上げてきた。この時期の特徴として、これらのライフスタイル関係の記事にも占い師が登場したり、コラムを掲載していることが挙げられる。さらに『マイバースデイ』は、学校に関連する行事によって特集を組んだり、表紙だけでなく記事や付録にも少女漫画家によるイラストを多用したりすることによって、誌面に統一性が与えられていた。また、読者投稿欄である「ハローバースデイ」や、

『マイバースデイ』の会員制度である「MB メイト」、占い師の講演会や他の会員との交流を目的とした「友の会」が、読者同士の結びつきを促してきたのもこのころの特徴である⁹。

では、80年代の『マイバースデイ』において「占い・おまじない」そのものはどのように取り上げられていたのだろうか。『マイバースデイ』では創刊当初から、十二星座ごとの運勢を詳細に記した「マンスリーホロスコープ」と「細密研究」が連載されてきた。当初は西洋占星術を中心に紹介されてきたが、次第に東洋占星術や超能力、心理テスト、いわゆるオカルトについての話題といった多様なトピックが取り上げられるようになる。そのなかで、80年代の特徴をなしているのが、魔女や魔法、魔術といったテーマを取り上げた記事である。特に、79年12月号の「魔女っこ入門」から誌面に登場した西洋占星術研究家のルネ・ヴァンダー・ワタナベは、魔女、魔法、魔術にまつわる専門的な知識を交えながら、魔女の儀式を思わせる複雑な手順を要する「占い・おまじない」を紹介するようになる。ルネは80年代の記事に毎月のように登場し、「友の会」で講演を行うなど中心的な役割を担ってきた¹⁰。

こうしたルネの紹介する「占い・おまじない」の内容は、大きく分けて二つの特徴を持っている。一つは、「占い・おまじない」を通して白魔女という理想像を提示している点である。白魔女の理想像を、もっともよく表しているのが81年6月号の「魔女っこテスト」であろう。ルネによると白魔女とは、「厳しい訓練を経て大宇宙と小宇宙（自分自身）をすっかり調和させて生活」することで「幸運体質」を形成し、そのそばにいてだけで周囲の人びとが幸せになる存在のことを指す。もう一つの特徴とは、ルネの「占い・おまじない」が、この白魔

女という理想像に向かって、自分の内面を磨く努力のいとなみの過程として設定されている点である。ルネが「占い・おまじない」を実行する読者のことを、「魔女っこ」と名づけているのはその現われである。

こうしたルネの姿勢は他の占い師にも影響を与え、さらには、「占い・おまじない」が学校でも実行しやすいものとして紹介されるようになる。例えば占い師であるマーク・矢崎治信は、「ハローバースデイ」の記事の一つとして、読者からの悩みに答えながら効果的な「占い・おまじない」を紹介する「マークの『魔女入門』」の連載を79年11月号より開始している。マークは記事のなかで、学校での人間関係に向き合う努力の重要性を読者に説き、御札やマスコットなどをそうした努力を後押しするものとして紹介してきた。また、占い師のエミール・シェラザードは「占い・おまじない」と、「ファンシーグッズ」を思わせる小物やお菓子、さらには少女漫画家によるイラストといったものと融合し、さらにはプレゼントとすることで、周囲の人間関係に向き合う手だてとしても提案している¹¹。

他方で、読者が自ら創作した「占い・おまじない」を紹介したり、それを実行した際の様子などを、読者投稿欄の「ハローバースデイ」や特集記事で積極的に報告しあうようになる。そうした投稿記事の内容からは、読者が周囲の人間関係に向き合う努力を重視していたことが読み取られるのである。

このように『マイバースデイ』の「占い・おまじない」は、読者である少女たちに、学校での人間関係に、軋轢を厭わず積極的、能動的にかかわり、相手を幸せにしようと努力をする存在として、「魔女」のモデルを提示するものであった。また、「占い・おまじない」は、ルネ

の影響を受けた占い師によって、実際に学校に持ち込める身近なものとなるだけでなく、少女文化と結びつくことで少女らしさを強調する役割をも果たしてきたのである。こうしたことから、「占い・おまじない」は学校での人間関係に積極的に向き合うことによって、自己の在り方を高めるといふ、いわば修養の場としての意味を学校に与えてきたと言えるだろう。他方で、80年代の『マイバースデイ』は、占い師を紐帯とした読者同士の緩やかな共同体を誌面の上で形成する役割を果たしてきたこともうかがわれるのである¹²。

しかし『マイバースデイ』の「占い・おまじない」が「魔女」のモデルを読者に提示してきたのは、もっぱら80年代に限られたことである。では、90年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」とはどのような内容を持ち、いかなる役割を担うものであったのだろうか。

3 90年代の『マイバースデイ』と「占い・おまじない」

3-1 『マイバースデイ』の変化とその様相

90年代の『マイバースデイ』に見られる最も大きな変化は、80年代には区別なく扱われてきたライフスタイルの記事と「占い・おまじない」の記事が、独立して提示されるようになることにある。そのことは、目次で両者が分けて表示されるようになったことや、ライフスタイル関連の記事に占い師が登場しなくなったことに現われている。また、「MBメイト」や「友の会」は継続されるものの、その活動が誌面で大きく取り上げられることが少なくなっていく¹³。さらに、少女漫画家によるイラストも減少するようになる。

そのなかで90年代の「ライフスタイル」の記事では、学校生活での人間関係に焦点を当て、相手に好印象を抱いてもらうことを重視した内容のものが見られる。例えば93年2月号では「オープンマインドの女の子になろう!」という題で、「話しかけやすく場を明るくする魅力がある。自分をもって、NOと言うこともできる」女の子を目指すという内容が掲載されている。また「朝は必ず自分からあいさつ」といった心得が列挙され、学校での友人やクラスメイトから好印象を持ってもらうことが目指されているのである。

こうした記事のなかには、異性や恋愛について取り上げた記事も見られるようになる。もっとも、異性についての記事は90年代に入ることさら目立つようになったわけではない。例えば90年代に連載が続いた「MBボーイズ心理接近チェック」シリーズは、すでに87年4月号から連載が始まっていた。当初は、異性の内面性や異性との関係の取り方を正面から取り上げることが多かったが、90年代になると手取り早く異性からの好感を得ることをねらいとした記事が目立つようになる。例えば、96年7月号「視線の流れをチェックしよう!」では、読者アンケートにもとづいて男の子が重視する女の子の体のパーツを、胸、脚、顔といったように紹介するものや、男の子はどのような女の子とセックスをしたいかの結果が載せられている。このように90年代の『マイバースデイ』におけるライフスタイルの記事をめぐっては、学校のなかで広く周囲から好感を抱いてもらうためのマニュアルの記事や、周囲からの印象を探るための記事が目立っている。では、90年代の『マイバースデイ』では「占い・おまじない」はどのように取り扱われているのだろうか。

3-2 目次に見られる「占い・おまじない」の題の変化

まず、大きな変化として80年代は固定した占い師が定期的に執筆することで、指導的な役割を果たしていたのに対して、90年代には多様な占い師が不定期に記事を掲載するようになったことがあげられる。そのため占い師に個別に焦点を当てただけでは、雑誌の全体像を把握することが困難になってきた。そうしたなかで、「占い・おまじない」の記事の題に変化が見られるようになる。

その変化を確認するために、「魔女・魔法・魔術」「心理テスト」「ランキング」が表題につく見出し記事の件数をグラフに示した。この図からは、90年代のはじめを境に、「魔女・魔法・魔術」といった語に代わって「心理テスト」「ランキング」といった語が多用されるようになり、その記事内容が大きく変化したことが読み取れる¹⁴。また、「おまじない」は「ランキング」の記事に連動する形で取り上げられるようになる。それに加えて、90年代からは、「精神世界」

に深く言及した記事も見られるようになるのである。そのことに注目しつつ、次に、「心理テスト」と「ランキング」としての「占い・おまじない」、そして「精神世界」を重視する「占い・おまじない」の三つについて、その内容を順次見ていくことにしよう。

3-3 「心理テスト」としての占い

図1に示したように、「心理テスト」に関する記事は80年代の後半から見られるものであった。また、「テスト」という言葉自体も、80年代なかばから見られる。ただし、それらは先述したルネの「魔女っこテスト」に代表されるように、それぞれの占い師の個性が反映されて多様な題名や内容を示すものであった。だが、90年代からは「心理テスト」と題した記事がそのほとんどを占めるようになる。そして、さまざまな占い師が記事を掲載しているにもかかわらず、その目的や内容には共通する要素が見いだされるのが90年代における「心理テスト」の特徴である。

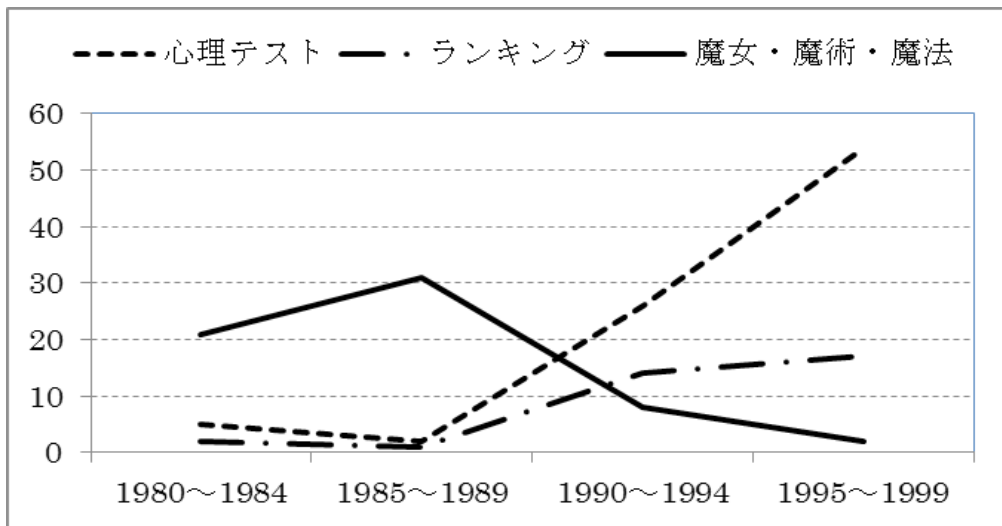


図1 見出しに使用された「魔女・魔法・魔術」「心理テスト」「ランキング」の推移

「心理テスト」の記事は、あらかじめ用意された選択肢を读者自身が順次たどることで個別の結果を読み取ることができるチャート式のものが目につく。例えば96年11月号の森井ゆうも「プリンセス物語心理テスト」は、读者が物語の上でお姫様になって物語の進め方を選択することで、自分をあらわす姫のタイプを判断するものとなっている。例えば「あなたがおやゆび姫でムリヤリ結婚させられそうになったら嫌なのは a.カエル b.モグラ」といった選択肢が設けられており、その選択肢をたどると次第に枝分かれして、最後にさまざまな姫のタイプのいずれかにたどりつくようになっている。続くページには例えば解説があり、「シンデレラタイプ」とはどのような性格か、相性の良い異性はどのようなタイプかなどが示されている。

さらに90年代では単に「テスト」と表記されたものでも、その題のなかで「心理」と組み合わせられて表示されるものもある。そのなかで典型的なのが、95年9月号の東野良軒「MBおもしろテスト友だち関係心理分析チェック！私ってみんなに好かれてる？キラワレてる？」という記事であろう。これは、学校で起こりうる事柄から、自分が周囲からどのように思われているかを判断するものである。例えばQ1では、「あなたのクラスに転校生が6人入ることになりました、友達になりたいのはどれ」という質問とともに、「がさつな体育会系の女の子」「暑苦しい根暗な男の子」といったキャラクターがイラスト付きで示されている。診断結果によると、どのキャラクターが嫌だと思うかという点から、自分が周囲からどう見られているかがわかるとある。例えば、「根暗な男の子」が嫌いという場合は『『みんなの先頭にたつ元気いっぱいのコ』なんて印象を周囲にあたえます。その反面、『男まさりで勝気なコ』な

んで感じで、少しおそれられている可能性も……。冷静に自分を見つめてね。」とコメントされている。

また、バレンタインデーを控えた2月号では、こうした「心理テスト」が数多く掲載されている。例えば、92年2月号ルナ・マリアによる「バレンタイン恋の必勝!!心理テスト集」では、表題に「成功率をもっとアップさせるために、あなたにピッタリのアタック法を教えちゃうよ！」とあり、続くページでは「恋を応援してくれるのは?」「彼にピッタリのアタック法は?」といった題で「心理テスト」の記事が6つほど掲載され、それによって、効果的かつ効率的に相手に思いを伝える方法を判断する仕組みとなっている。

このように、「心理テスト」としての占いは、自身が周囲からどう見られているかというイメージや、周囲の人びとの性格などを、その都度の場面や親密さの度合いごとに分析するものとなっており、それによってどのようにふるまえば好印象を得られるのかを判断するための手がかりを与えるものとなっている。ここでは、姫といった非現実的なモチーフはあくまで「心理テスト」を行うための道具立てに過ぎない。学校における具体的な場面での振る舞い方とか、思いの伝え方などが「心理テスト」の対象として取り上げられているのは内面よりも、自分がひとからどう見られているかをより現実的に即して判定しようとするねらいがあるためと考えられる。では次に、「ランキング」としての「占い・おまじない」の記事を取り上げてみよう。

3-4 「ランキング」としての「占い・おまじない」

「ランキング」という題の記事も80年代にも見られるが、それは特集の一部として取り上

げられる程度であった。90年代に入ると、こうした「ランキング」の記事は、特集としてまとまった内容のものが頻繁に提示されるようになる。そして、そのほとんどが、十二星座のそれぞれをランクづけして結果を示したものとなっている。さらには、人間関係をめぐる具体的な場面に応じたものが、詳細に取り上げられていることに特徴がある。例えば、占い師モナ・カサンドラによる96年4月号「Spring ラッキー星座ランキング」は、新学期に備えて、「学校が大好きになるのは?」「先輩、後輩と仲良くできるのは?」といったテーマが並べられており、それぞれに運の良い星座が表示されている。また、続く「これで学校運のラッキー度UPですよ♡」というコラムでは、運気を高めるための「おまじない」に相当する記事も掲載されている。例えば、うお座は「手づくり名刺をもって登校するとラッキー！」などといった具合である。

ただし、90年代に入ってからの特集には、その目次の表題に「ランキング」と表示されていない場合でも、その中で提示しているものも見られるようになる。例えば95年2月号の鏡リュウジ、中谷マリによる「バレンタイン恋の運勢ハッピー予報」は、その月の特集として大きく取り上げられている。その冒頭では、「バレンタイン、ラッキーなのはこの星座!」という題で、「チョコがじょうずにつくれる」「ライバルの動きに注意すべき」といったテーマごとに星座の運勢が「ランキング」形式で様々に紹介されている。この特集において最も目につくのが「100位までランクづけ!!彼とあなたの告白OK♡の確率占い」だろう。これは告白の成功率について相手と自分の星座で割り出したものを、144マスの図表にして示したものに、1位から100位までの番号が振られたものと

なっている。

さらに、こうした占いは占い師によるものではなく、読者アンケートによって構成された記事もある。例えば96年11月号の「12星座別人気獲得大作戦!!」という特集では、新学期を前にしてクラスで人気者となるにはどうしたらよいかについて、さまざまな占いの結果が掲載されている。そのなかの記事である、「読者アンケートによりここに決定する独断と偏見のなんでも星座ランキング」では、相手の星座から受ける印象が読者アンケートに基づき「ランキング」形式で紹介されている。また、続く「○○座にひとこと言いたーい、そんなあなたがイヤ!!なんです。」と題する記事では、次のような文章が、十二星座ごとに並べられている。

人の弱点をズバズバ言って傷つけてしまいがちなのはいて座「あるいて座のこに、テストの点数を教えたら、“私よりバカだったんだ”と言われてすごくやさしかった」(よしちょ・中3・おとめ座)「いて座のこって何気ない言葉で傷つけるからイヤ」(KIRA・高3・おうし座)また平気で約束をやぶったりする、ちょっといいかげんなところも「バレバレのウソをついてへーキで破ってちょーおしゃべりないて座のK、ザケンナ!」(ももいろ子・高3・さそり座)(1996年11月号:16)

記事の最後には「みんなどんどこがイヤなのかこれでわかったかな。心当たりのある人は、そっとまわりの友だちにチェックしてもらおう」と編集部のコメントが付されている。このように、「ランキング」としての占いは、学校生活で日常的に直面する場面に応じて、それぞれの星座がどのように見られているのかということや、異性との関係を発展させたりするた

めにはどのような注意を払ったらよいかを、類型的かつ多角的に示すものとなっている。読者アンケートと組み合わせられるようになったのも、より具体的な内容が求められるようになったためであろう。その一方で「おまじない」は、予測される事態にどう対応するのかを示す程度の簡単な内容で、占いに付随するような位置に置かれるのである。

ここまで見てきたように、90年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」は、「心理テスト」や「ランキング」といった形で学校生活の人間関係を分析し、そのなかで自分がどのように見られているのかを把握するものが見られるようになった。他方で、90年代の『マイバースデイ』は、「精神世界」に言及した「占い・おまじない」に相当する内容のものも取り上げるようになる。次に、そうした内容の記事を見てみよう。

4 「精神世界」と「占い・おまじない」

「精神世界」にまつわる事柄について言及した記事は、雑誌の後半に置かれるのが『マイバースデイ』の通例である。また、こうした記事は、一つのテーマに沿って載せられる傾向にあり、学校生活にまつわる内容のものと同様に、「心理テスト」と称されることもある。その例として、95年5月号の森井ゆうもによる「逆行催眠心理テスト」が挙げられる。これは、現在の自分から子どものころ、さらには転生を待っている「霊界時代」にまで遡ることをイメージする内容のものとなっている。例えば「前世時代」という題の記事では、まず「霊界に旅立とう」としている状態を想像し、そこで手を握ってくれた相手についての選択肢が示されている。そして、選択肢に応じて必要な癒しの方法がわか

るようになっている。

こうした占いでは、将来、大人の女性となった時、どのような生き方があるのかを提示するものもある。例えば93年4月号に掲載された鏡リュウジによる「小惑星セレス、パラス、ジュノーでわかる女性の生き方3つの顔!!」は、小惑星の影響を取り入れた占いの記事である。こうした新しい占いを紹介する理由として鏡は、「占星学もひとつの学問である以上、日々発展進歩を遂げて」いるとしたうえで、次のように述べている。

どうして今までの星だけではだめなのでしょう。それは、簡単にいえば人間の社会と意識が時代とともに複雑になっていって、今までの惑星だけでは足りなくなったからです。たとえば時代とともに女性は男性と同じように公の顔と私生活の顔などをつかい分けなければならなくなり、それに対応して小惑星を用いるようになってきたのです。(1993年4月号:193)

続く記事では影響を与える小惑星を割り出した上で、「どんな妻、母になるか」とか「どういう仕事につくか」などが書かれている。例えば「ジュノーがてんびん座」の人は結婚後に家事をおろそかにしやすいが、それは女性だけの役割ではないので分担していくとよいというようなアドバイスが付されている。こうした記事では、80年代の記事にも見られるように、占星術についての専門的な知識も示されている。また95年4月号には、風水について取り上げた小林祥晃による「恋が実る部屋、こわれる部屋」や、神秘的な力を秘めた石とされるパワーストーンについて解説した宮沢みちによる「きれいだから、好き! パワーストーン」なども掲

載されてきた。

このように、90年代の「占い・おまじない」の記事のなかには、死や霊界といったものや、西洋占星術のなかでも専門性の高い知識が示されており、「精神世界」について掘り下げた記事が見られるようになる。そうしたなか、マドモワゼル愛は93年6月号から「読めば心が楽になる大切な30のお話」を連載し、その続編として96年1月号から「精神世界エッセイ」と副題をつけた「ハートカプセル」と題するエッセイを連載するようになる¹⁵。例えば「ハートカプセル」の第一回目では、「心はあなたの思っていた方向に動いているのです」という副題が付されている。その内容としてはまず、「心」の在り方が悲観的な気持ちに傾く惰性を避け、「心」の習慣を変える必要があると述べている。なぜなら、心は明るければ天界へつながり、悲しい時には幽界につながっているからだと言われているのである。ただし、こうした考えについて愛は「こうしたことをこれまでは宗教的に解釈してきたのですが、これは宗教ではありません。人間の心の働きは無限であって、この世的なエリア外にも通じるということです。」と述べている。他にも、95年4月号の「彼の愛をつかむ告白後の態度について」では、相手に告白をしたあと、心の揺れを抑えつつ相手の返事を待つことの大事さを説き、以下のように述べている。

待てるのは本当の大人だけです。心が貧しく弱く自己愛にしか関心のない人は待つことができません。反対に言うなら、どんなに貧しく弱くとも、待つことを知れば私たちはりっぱな女性になれるのです。育児が子どもの成長を待ち耐える面が大きいように、それは女性に求められる資質でしょう。(中略)

待つことを知った女性ならば、しゃべれない赤ちゃんがしゃべれるのを楽しみに、歩けるのを楽しみに、日々変わらぬ笑顔を赤ちゃんに投げかけていくのではないのでしょうか。(1995年4月号:136)

このように、愛のエッセイは「精神世界」に深く言及するなかで、それが現状をそのままに受け止める「心」の在り方と密接に結びついていることを主張してきたことに特徴がある。そしてそうした「心」の在り方こそが、大人の女性へと成長を遂げる必要な資質であると愛は言うのである。ただし愛のエッセイはあくまで読み物として提示されるものであり、具体的な「占い・おまじない」の行い方や、その内容を紹介するものではない。

5 脱「魔女」化する「占い・おまじない」とその様相

以上、ここまで『マイバースデイ』の90年代の記事を中心に整理してきた。ここからは、80年代における「占い・おまじない」のありようと比較しつつ、90年代の特徴についてあらためて検討していきたい。

みてきたように、80年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」は、神秘的な力を身に付けて周囲を幸せにする白魔女の理想像をもとに、その理想像に向かって努力する存在として、「魔女」のモデルを読者に提示するものであった。述べたように、80年代に入り多様な占い雑誌が発刊されてきたが、そのなかで『マイバースデイ』が大きく支持を得てきたのも、独自の「魔女」のモデルを読者に示してきたからであると言えるだろう。さらに『マイバースデイ』は、占い師と読者による緩やか

な共同体をも形成してきた。それに対して90年代の『マイバースデイ』では、ライフスタイルの記事において、学校で周囲から好印象を受けるための記事が優勢となる。また、90年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」では、周囲からどのように見られているのかを判断する、「心理テスト」と題された占いと、学校の人間関係で遭遇する場面について十二星座ごとに運勢の良いものを提示する「ランキング」としての占いが、それぞれの場面に応じて効果的、効率的な「おまじない」とも紹介されるようになる。

このような特徴から理解されるように、80年代の「占い・おまじない」は「魔女」のモデルを提示し、そこに向かって努力することで望ましい自己が獲得されるという考え方が示された。さらには、その努力のための空間として、学校という場を意味づけする役割も担ってきたのである。こうした役割は、学校という限定された場であるが、少女たちにとっては切実で重要な意味を持つ「世界」に対して、一つの統一された意味、すなわち「天蓋」に相当する意味を与えるものであったと言えるだろう。だが、90年代にはこうした「魔女」のモデルは後退し、「占い・おまじない」は「天蓋」を担う役目から降りていった。だが、「占い・おまじない」は誌面から後退したのではなく、学校という空間のなかでの人間関係を、その場面や状況に応じてさまざまな角度から分析するツールへと変化した。そのことから、「占い・おまじない」の目的がそれに依拠して分析される人間関係、すなわち他者からの視線という指標によって左右されるものであり、少女が自己を状況依存的に位置づけるためのものになったと言えるだろう。誌面を通した占い師や読者同士のつながりが強調されなくなったのも、こうした現実での

人間関係を重視するようになった変化と関連していることが推測される¹⁶。

こうした変化からは、「占い・おまじない」を「認識のための『地図』」とみる芳賀、弓山の見方は、90年代の「占い・おまじない」においてこそ強く見られるものであったと指摘される。ただしその「地図」とは、学校という限定された空間での人間関係を、さまざまな角度から逐次、分析することに重きを置くものであった。言い換えれば、ここでは「地図」そのものをいわばフェティッシュに描くことが目的とされているのであった。そして、そのような「地図」によって確定される自己とは、学校での異性や友人を参照点としながら、辛うじて局所的に把握されるだけの存在にすぎないのである。しかしだからと言って、90年代の「占い・おまじない」が少女たちにとって些末なものとなったとは言えないだろう。むしろ、学校で少女たちが抱く不安に対し、自己を位置づける「地図」を示すことで対処する役割へと「占い・おまじない」が変化したと言える。ただし、みてきたように、ここでの「地図」を提供しているのは、バーガーのいう「一般的な『社会学』」ではなく、「占い・おまじない」なのである。だが、こうした90年代の『マイバースデイ』にみられる「占い・おまじない」の特殊な役割からは、学校という限定された空間の中で、「安住の地の喪失」と呼べるような不安を少女たちが抱えていたことを浮き彫りにする¹⁷。

他方でこうした動向は、少女たちのあいだから「占い・おまじない」の魅力が失われていく可能性があったことがうかがわれる。なぜなら、学校における自己の位置を把握する「地図」が手に入れられるならば、それは必ずしも「占い・おまじない」による必要はないからである。整理したように、90年代の『マイバースデイ』

における「ライフスタイル」の記事には、学校のなかで自身がどのように見られているのかを探る内容のものが掲載されるようになった。手段は異なるが、それは「占い・おまじない」とライフスタイルの記事との役割において、大きな差異は認められないのである。90年代の「占い・おまじない」が神秘性を強調しなくなったのも、「魔女」のモデルが脱落しただけでなく、人間関係を分析する機能がより重視されるようになったからにはほかならならい¹⁸。このことは、「占い・おまじない」の情報を得る手段が雑誌からウェブに移行しただけでなく、2000年代に入って『マイバースデイ』をはじめとする占いの専門誌が相次いで休刊、廃刊するに至った一つの要因として考えることができるのではないだろう¹⁹。

しかし、だからと言って「占い・おまじない」が魅力を失ったわけではない。見てきたように、90年代の『マイバースデイ』に登場した「精神世界」に言及する記事では、女性としての多様な生き方や成長するための「心」構えがしばしば言及されている。そのことで、90年代の『マイバースデイ』は少女たちに、学校の外側にも目を向けさせていた。「スピリチュアル・ブーム」へと接合するこうした動向とは、「魔女」のモデルは登場しないものの、90年代でもいわゆる魔術的なものが「占い・おまじない」に見いだされるものであると言える。これは、個人が自身の宗教性やスピリチュアリティを選び取ろうとする「個人の再聖化」といった観点からとらえられるだろう²⁰。ただし、こうした内容のものは、冒頭で挙げた他の占い雑誌にも見られるものであり、必ずしも『マイバースデイ』に独自の傾向とは言えない。そして、ここで「占い・おまじない」が示す女性としての将来像は、あくまで「妻」や「母」といったジェ

ンダーの枠組みを前提としているのである。

おわりに

以上、見てきたように、80年代の「占い・おまじない」は「魔女」のモデルを提示し、学校という空間に対して、努力によって自己を獲得する場としての意味を与えるものであった。それに対して、90年代の「占い・おまじない」は、一方で学校での人間関係をその都度の場面に応じて分析するための道具を提供するものと、他方で学校とは離れた形で「精神世界」を追求することで、大人の女性としての将来を考えるものへと分化していった。このように、90年代の『マイバースデイ』における「占い・おまじない」は80年代とは異なる様相を示すようになったが、それでもなお、学校生活から離脱する方向性を示したり、変革をもたらそうとしたりする方向性を示すことはなかった。この点で、「占い・おまじない」は「宗教ブーム」という基盤を共有しながらも、現実世界の変革を暴力という形でもたらそうとしたオウム真理教とは、対極に位置すると言えるだろう。

冒頭でも述べたように、2000年代に入って大人の女性たちの間に広まった「スピリチュアル・ブーム」において、再び「占い・おまじない」も注目を集めている²¹。そこでは、「精神世界」に深く言及した書籍などが登場しているだけでなく、「占い・おまじない」に関する専門的な書籍なども紹介されるようにもなった。また、占い師による教室も開設されるに至っている²²。このように、80年代の「魔女」、90年代の「精神世界」への関心、さらには2000年代以降の「スピリチュアル・ブーム」という流れの中には、一貫して、個人的なレベルで宗教的なものを選び取ろうとする動きが継続してみられるの

である。こうした流れのなかで、新たに魔女や魔術といったものの存在が注目されていることも強調しておきたい。そのさい、ジェンダーの視点をどうとらえるかが、一つのカギになると思われる。

注

¹ 本稿で採用する脱「魔女」という表現は、『マイバースデイ』に限定的な意味において使用している。

² 読者数に関しては、国立国会図書館インターネット資料保存事業における「第86回常設展示占いあれこれ」(2010)を参照されたい。

³ 一般に、伝統的な占いは、超越性を象徴する天体や植物などが示す予兆を読み取り、天候や災厄といった未来の出来事を予測するものとされてきた(板橋2001)。他方、まじないはそうした災厄を予防する技法として受け止められてきたという違いがある(神崎1999)。重要なのは、伝統的な占いやまじないは、社会や集団に関する事柄を対象としている点である。それに対し、近年の占いとまじないは個人を重視するものとなった。『マイバースデイ』において両者は混交して提示されており、内容からその両者の役割を区別することは難しい。このことから、本稿では「占い・おまじない」と一体的に表記する。

⁴ 島蘭進は1980年代から90年代の「宗教ブーム」を構成する要素として他に、新新宗教の発展、拡大と、「霊性」(Spirituality)を重視する世界観を共有しつつも、個人主義をとる人々から支持を集めてきた新霊性運動の出現を挙げている。このなかで、組織を形成する新新宗教と、大衆に広く浸透した「呪術=宗教的大衆文化」は対照的な存在として位置づけられている(島蘭2001:172-196)。

⁵ 他にも、『マイバースデイ』をはじめ、当時、数多く出版されていた女性向けの占い雑誌を分析、検討した芳賀の議論が挙げられる(芳賀1994:67-

72)。

⁶ オウム真理教と『マイバースデイ』の双方に言及していたものとして、例えば弓山達也による「青年層における宗教情報の伝達について」という題の報告書が挙げられる。これは、「宗教と社会」学会第3回学術大会で行われた「情報時代は宗教を変えるか?」というテーマのシンポジウムでのものであり、若者の間に広まる宗教観とメディアの関係性について、大学で行ったアンケートをもとに分析したものである。そのなかで、『マイバースデイ』が「おまじない」の内容を標準化し、流布させる機能を果たしてきたと言及されている。なお、このシンポジウムの冒頭で弓山は、オウム真理教が宗教と情報化を論じる上で重要な手がかりであることも指摘している(弓山1996:25-45)。

⁷ 「スピリチュアル・ブーム」とは、「精神世界」に関与するグッズやセッションが商品としてやりとりされるブームの広まりを指す。有元裕美子はこれを「スピリチュアル市場」と名づけ、「占い・おまじない」も含めて量的な分析を行っている(有元2011)。また、「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原啓之が、メディアでどのように受容されてきたのかを検討した堀江宗正による議論も参照されたい(堀江2005:50-74)。さらに、ブームで注目を集めた西洋占星術研究家の鏡リュウジについて、橋迫(2012)を参照されたい。

⁸ 雑誌を分析する方法として、今回は言葉をカテゴリー化して分析する手法(牧野2013)ではなく、主に雑誌の目次や文脈に注目して論じる方法をとった。その理由として、『マイバースデイ』は、記事の文脈に踏み込まないとその変化が見出しにくいことが挙げられる。

⁹ MBとはmy birthdayの略である。なお、2012年に発刊された『マイバースデイ』の復刻版によれば、第1期の会員数は約3万人であり、第1回の「読者の会」には600人ほどが集まったとされている。

¹⁰ルネは本名を渡辺幸次郎といい、彼が創設した「ルネ・ヴァン・ダール公式研究所」のHPによれば、1942年生まれの西洋占星術家である。『マイバースデイ』の他、著作活動や、テレビに出演するなどしていた。なお、ルネは2011年11月に没している。

¹¹占星術家であるマーク・矢崎はルネに先駆けて『マイバースデイ』に登場しているが、88年10月号に掲載された「マークの魔女入門特集」のなかで、読者からの質問に答える形でルネの著作に影響を受けて執筆活動をはじめたことや、ルネを先生と思っていると答えるなど、ルネからの影響を受けていることがうかがわれる。また、東洋占星術も専門とするエミールは、ルネと一緒に記事に誌面に登場しており、同じくルネの影響を受けていることがうかがわれる。両者について詳しくは橋迫(2014a; 2014b)を参照されたい。

¹²こうした『マイバースデイ』の特徴は、修養を重視し関連する書籍を出版してきた実業之日本社の姿勢とも関連していると思われる。詳しくは馬静による議論(馬静2006)を参照されたい。また、実業之日本社は近代における「少女」像の確立に影響を与えた雑誌『少女の友』も出版してきた(今田2007)。

¹³80年代の『マイバースデイ』において中心的な占い師として人気を集めたルネは、90年代以降、先に触れた占い専門誌『MISTY』に活動の重点を移すようになる。

¹⁴また、それまで『マイバースデイ』のマスコットであった魔女を模した「マイビーちゃん」が1989年5月号から別のキャラクターに変更されている。

¹⁵マドモワゼル愛は、西洋占星術を主な専門とする男性の占い師であり、『マイバースデイ』には80年代から記事を掲載したり、「友の会」に参加をしてきた。現在も、執筆活動やラジオ出演など

の活動を行っている。

¹⁶こうした90年代の「古い・おまじない」は、「心理主義化」(森2000)に近い働きを担っているようにも見える。しかし、90年代の「古い・おまじない」は自己の内面や、「自己実現」といったものに踏み込むものではないという違いが指摘される。

また浅野智彦は90年代から2000年代にかけての若者に対する意識調査から、若者の関係性が希薄化したのではなく、関係性のなかで友人を場面によって選ぶ「多チャンネル化」「状況志向」を示すようになったとしている(浅野2006: 233-260)。

¹⁷さらに浅野は、若者からは「友人関係をうまくマネージメント」するために、「今おかれている関係がどのようなものであるのか、そこで共有されている情報は何か」を見極める「繊細さ」が見いだされるとしている(浅野2006: 233-260)。

¹⁸こうした例として、2000年代に入って急速に普及したケータイが挙げられる。例えば土井隆義は『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』(土井2008)のなかで、2000年代から若者のあいだに急速に普及したケータイについて注目している。なかでも土井はメール機能に注目し、そこで若者が重視しているのはその内容ではなく、やりとりすることそのものであると指摘する。その上で、ケータイとは身体に寄り添って自分の内面を外的世界と媒介する、いわばナビゲートツールであると述べている(土井2008: 140-176)。こうした若者にとってのケータイのありようは、学校を中心とする人間関係のなかで、自らの居場所を判断しようとする90年代の『マイバースデイ』に見られる「古い・おまじない」に類似していると言えるのではないだろうか。

¹⁹現在『マイバースデイ』はウェブにホームページを開いている。後続サイトについては「説話社ハッピーウェブ」(2015)を参照されたい。

²⁰島蘭進は現代日本社会において、「個人のスピリ

チュアリティが尊ばれる動向」と「宗教復興勢力が集団的な宗教性を尊ぶ動向」が両極を向いていると指摘した上で、両者には共通して個人が新たに宗教性やスピリチュアリティを獲得しようとする「個人の再聖化（宗教化）」が見いだされると述べている。詳しくは島菌（2007: 301-304）を参照されたい。

²¹ ただし、「スピリチュアル・ブーム」から若者が

完全に撤退したわけではない。詳しくは堀江による議論（堀江 2010）を参照されたい。

²² こうしたものとして、例えば鏡リュウジが『朝日カルチャーセンター』で開講しているものや、原宿にある占いの館『塔里木』の教室などが挙げられる。また、「説話社ハッピーウェブ」も2015年3月から「ちえの樹」という教室を開講する予定である。

文献

有元裕美子, 2011, 『スピリチュアル市場の研究——ランキングで読む急拡大マーケットの真実』東洋経済新報社.

浅野智彦, 2006, 「若者の現在」浅野智彦編『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』勁草書房.

粟飯原淑恵・アレーナ・ガラール, 1989, 「COSMOPOLITANに見る日米墨の男性獲得法」井上輝子・女性雑誌研究会『女性雑誌を解説する——COSMOPOLITAN日・米・メキシコ比較研究』垣内出版株式会社, 191-208.

Berger, Peter and Berger, Brigitte and Hansfried Kellner, 1973, *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, New York: Random House Inc. (= 1977, 高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』新曜社.)

土井隆義, 2008, 『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.

Giddens, Anthony, 1990, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*: Polity Press. (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)

芳賀学, 1994, 「少女たちの物語製造装置・占い」『大航海』(1)新書館, 67-72.

———・弓山達也, 1993, 『祈る ふれあう 感じる——自分探しのオデッセー』IPC.

橋迫瑞穂, 2012, 「『占い・おまじない』と女性——鏡リュウジと『地図』の変容」『ソシオロゴス』36: 84-98.

———, 2014a, 「『おまじないグッズ』における『手づくり』と少女——雑誌『マイバースデイ』の事例から」『年報社会学論集』27: 146-57.

———, 2014b, 「『占い・おまじない』と少女——雑誌『マイバースデイ』の分析から」『宗教研究』381: 77-99.

堀江宗正, 2010, 「スピリチュアルとそのアンチ——江原番組の受容を巡って」石井研士編『バラエティ化する宗教』青弓社.

———, 2011, 『スピリチュアリティのゆくえ（若者の気分）』岩波書店.

板橋作美, 2004, 『占いの謎——いまも流行るそのわけ』文藝春秋.

今田絵里香, 2007, 「『少女』の社会史」勁草書房.

- 神崎宣武, 1999, 『ちんぷいぷい——「まじない」の民俗』小学館.
- 国立国会図書館, 2010, 「第86回常設展示占いあれこれ」, 国立国会図書館インターネット資料収集保存事業 (2015年3月17日取得, <https://mavi.ndl.go.jp/kaleido/tmp/86.pdf>).
- 牧野智和, 2013, 『自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.
- 馬静, 2006, 『実業之日本社の研究——近代日本雑誌研究への序章』平原社.
- 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻』講談社.
- 諸橋泰樹, 1993, 『雑誌文化の中の女性学』明石書店.
- 大塚英志, 1995, 「補論ファンシーグッズの少女民俗学——おまじないと〈モノ〉の位相」『「りぼん」のふろくと乙女ちっくの時代——たそがれ時にみつけたもの』筑摩書房, 187-212.
- 説話社, 2015, 「説話社ハッピーウェブ」, 説話社ホームページ (2015年3月17日取得, <http://mbhappy.com/>).
- 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教——現代日本の精神状況の底流』東京堂出版.
- , 2007, 『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店.
- 鈴木正崇, 2006, 「占いの世相史」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学③——都市の生活リズム』吉川弘文堂, 91-119.
- 弓山達也, 1996, 「青年層における宗教情報の伝達について」池上良正・中牧弘允編『情報時代は宗教を変えるか——伝統宗教からオウム真理教まで』弘文堂, 25-45.

(はしきこ みずほ、立教大学社会学部、mizuho.h@f8.dion.ne.jp)
(査読者 堀江宗正、牧野智和)

“Fortune-telling & charm goods” Breaking way from the Ideal Model of “Witch” :

Through the analysis of the magazine “My Birthday” in 90’s

Mizuho HASHISAKO

This paper is aimed at investigating what happened between the boom of fortune-telling and charm among girls in 1980s and its deterioration in 2000s in Japan, through analyzing the articles of “My Birthday”, which is well known as a representative “fortune-telling & charm” magazine for girls. As I have already made clear at another paper, fortune-telling and charm in 80s showed girls the ideal model of “Witch” and encouraged them to face up positively to their school lives, by cultivating their character aiming at the model. But fortune-telling and charm in 90s was changed to be a “map” with which they could make sure how to find out their standpoint in school. Thus fortune-telling and charm has already been changed to be a mere convenient tool to give girls information with which they could survive their hard school life. But on the other hands, fortune-telling and charm has become to describe about “spiritual world”.